

扁額からみた中国・頤和園と韓国・昌徳宮後園空間の特徴と比較

A Comparative Study of Space Characteristics of Chinese Summer Palace and Korean Changdeokgung Palace Garden from the Aspect of Horizontal Tablet

咸 光珉* 孔 明亮* 三谷 徹* 章 俊華*

Kwangmin HAM Mingliang KONG Toru MITANI Junhua ZHANG

Abstract: This study takes Chinese Summer Palace and Korean Changdeokgung Palace garden as study sites, interpreting Horizontal tablets' meaning along with architects, aims to compare the characteristic of spaces in the two imperial palaces. The findings are: many horizontal tablets in Chinese Summer Palace have relationship with landscape characteristic, such as: surrounding nature, natural phenomena, overlooking and so forth. Meanwhile, through expressing landscape impressions in literature way, giving meanings to horizontal tablets, to deepen its space characteristic. However, Horizontal tablets in Changdeokgung Palace garden show a strong concept of Confucianism, which is considered as the basic ideology of that era. Confucianism emphasizes human physical- spirit connection, including morality, endurance, studies and so forth, this concept is also reflected in architects' function and palace elements. In a word, the horizontal tablet in Chinese and Korean Imperial Palace, not only connecting architect and garden space physically, but also reflecting cogitation and culture at that time, thus it is a significant element to expand our understanding to imperial palaces.

Keywords: Summer Palace, the Garden of Changdeokgung, Horizontal Tablet, characteristic of space

キーワード：頤和園，昌徳宮後園，扁額，空間特徴

1. はじめに

(1) 研究背景と目的

中国と韓国は近接する地理的特徴と漢字文化圏に属し、多くの社会・文化的交流が行われてきた。中韓の宮殿庭園においては、多くの建築が存在し、その機能と目的により形態と名称が異なっている。ここで、名称を表すものは扁額と呼ばれ、建物入口の上部に掛けられており、扁額の意味には当時代の思想と文化だけでなく、建築および空間の特徴が反映されている¹⁾²⁾。扁額発生地である中国³⁾では、以前より扁額の研究が多くなされてきた。中国宮殿庭園扁額の意味解釈とともに漢字の語源を紹介した書籍に始まり(鈞成, 成鋼, 1985)⁴⁾、頤和園扁額の意味を解釈した上、空間にどのように反映されたのかを明らかにした研究がある(章, 1999)⁵⁾。また、拙政園の扁額と柱連から意境を整理し、空間との関係性を研究したものもある(谷, 2008)⁶⁾。一方、韓国では、宮殿建築の名付けにあたって思想と文化的特徴がどのように現われるかを分析した研究(眞, 1998)⁷⁾や、宮殿、寺院、書院で扁額を分け、形式と刻法の特徴を明らかにした研究(權, 2006)⁸⁾、さらに、筆者らは韓国昌徳宮後園における扁額の意味に反映されている背景から、庭園空間の特徴を明らかにしてきた⁹⁾。整理してみると、中国では扁額の意味研究や、扁額と空間を結びつけることで庭園を新たに解釈する等、思想・空間的な面からの研究があり、韓国では扁額の名前がもつ意味や刻まれている文字の刻法、文様等、思想・形態的な面からの研究が先行されている。しかし、中韓両国の宮殿庭園を対象とし、扁額とともに庭園空間の特徴を比較分析した研究はみられないため、扁額の意味と空間解釈を合わせて分析する研究は意義があると考えられる。

したがって、本研究は中国の頤和園と韓国の昌徳宮後園を対象とし、扁額の意味を解釈し、扁額が掛けられている建築を結びつけ、両国宮殿庭園空間の特徴を比較することを目的とする。

(1) 対象地選定および概要

本研究は中国の頤和園と韓国の昌徳宮後園を対象地とする。選定理由は①両国を代表する宮殿庭園であるため、当時代の建築および造園の特徴がよく見られ、②世界遺産に登録され、景観的価値が世界的に認められており、③頤和園の造成時期(乾隆帝: 1750~1764)と昌徳宮後園の空間的基盤が作られた時期(仁祖, 正祖: 1623~1792)¹⁰⁾の差が大きくなく、比較対象としてふさわしいと判断したためである。

頤和園は中国皇室の夏離宮で、宮全体が庭園となっており、面積は290haである。園内の万寿山と昆明湖を中心とし、水面は約220haと、宮全体の約75%を占めている。地理的には北京市の中心部から北西約15kmに位置し、三山五園¹¹⁾の一部に属する風水がよい場所である。昌徳宮後園は宮に属している庭園で、園面積は33haと、宮全体の約60%を占めている。地理的には北嶽の梅峰裾に位置し、全体的に北西へ向かって高くなる地形である(図1)。

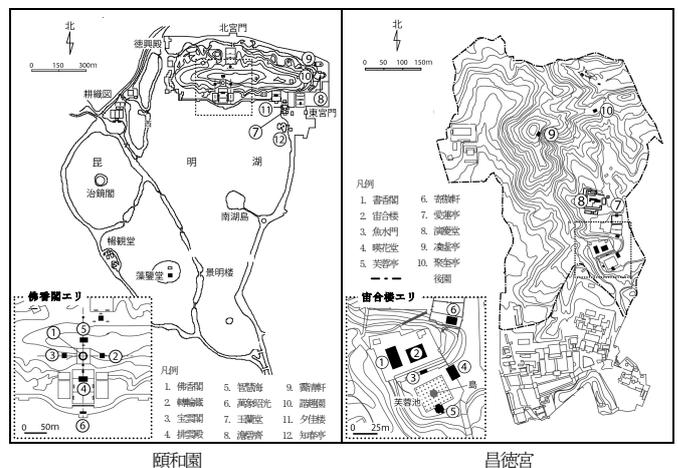


図-1 平面図

2. 研究方法

*千葉大学大学院園芸学研究所

表-1 扁額の意味解釈による分類方法と象徴要素

扁額名	意味	象徴要素
Y 雲郁河清	多くの雲が集まり、黄河の水が清い(国は平和であり、民は幸出になることを表す) L2 L1 P2 黄河の水 雲が動く自然現象を描写 土砂のためぼやけている黄河が王の恩徳により清くなり、社会の繁栄と安定がもたらされる	I1 五方五智五仏、五経、仏陀、儒家、仁徳
		I2 金・水・木・火・土の五行
		I3 長寿、寿命が延びる、太平、安寧
C 聚奎亭	星が牽星で集まって来る(人材が集まって穏やかになることを表す) L2 P3 P2 優秀な人材たちの知恵発揮 星が動く自然現象を描写 乱の以後混乱した時期、人材の知恵により正しい政治の実現とともに社会安寧がもたらされる	P1 太陽、玉、非常に高い、天下、龍宮、帝王の命令、光る
		P2 幸福、平和、安楽、平和、恩徳、光に当たる、繁栄、良い評判、水が清い
		P3 縁起が良い、賢明な、合理的、意見を集める、吉兆が集まる
C 凌虚亭	虚寂に上がる L3 後園で一番高い所(標高90m)に位置し、扁額の意味と関連付けられており、宮の全景を鑑賞することができる	L1 川、水、波、蕙、山、草木、湖、花、蘭、桂
		L2 雲、風、雨、雪、煙、光、影、夕日、夕方、月光、春、秋、音、露、霞
		L3 ある対象や自然風景を描写・淨い、觀賞する、見る、雲に覆われる、見下ろす、境界

注: 1) Y-頤和園, C-昌徳宮後園。扁額の解釈は引用文献 2)、I2を中心に参照 ()は意訳。沿革の内容を整理する
 2) I1 宗教, I2 陰陽五行, I3 神仙, P1 権勢, P2 恩徳, P3 知恵, L1 自然物, L2 自然現象, L3 眺望
 3) 表1にある扁額は、紙面の都合上、分類を行った両園の扁額中(頤和園:168、昌徳宮後園:36)、代表的扁額列を挙げることにする

(2) 扁額の解釈および分類

研究対象は両宮殿庭園に存在する扁額で、文献資料に記録されているが、復元されていない扁額(頤和園:14箇所、昌徳宮後園:4箇所)を含むすべての扁額(頤和園:168箇所、昌徳宮後園:36箇所¹²⁾)である。頤和園の扁額解釈は、漢字の直訳と意識、沿革がよく説明されている「頤和園匾額楹联解读」¹³⁾を主資料とし、頤和園の扁額と空間の特徴を考察した章(1999)¹⁴⁾の研究を参照する。昌徳宮後園の扁額については、原典と意味が具体的に説明されている「宮闕の懸板と柱連2」¹⁵⁾を主資料とし、「奎章閣韓国学研究院」¹⁶⁾、「韓国古典総合DB」¹⁷⁾を参照し、解釈する。

扁額の分類カテゴリーは、先行する頤和園の章(1999)と昌徳宮の眞(1998)の研究¹⁸⁾を参考にし、思想(I)、政治(P)、景観(L)の3つのカテゴリーで再構成し、分類する。さらに、思想(I)は儒教(I1)、陰陽五行(I2)、神仙(I3)の3つ、政治(P)は権勢(P1)、恩徳(P2)、知恵(P3)の3つ、景観(L)は自然物(L1)、自然現象(L2)、眺望(L3)の3つ、合わせて9つのサブカテゴリーに細分する。

(3) 分析方法

本研究では、1999年に実施した頤和園扁額のデータ¹⁹⁾と、筆者らが2012年に実施した昌徳宮後園扁額のデータ²⁰⁾を用い、集計・分析を行い、両宮殿庭園の空間的特徴を比較する。分析の手順では、第一に、頤和園と昌徳宮後園扁額の意味から扁額を分類し、分類された各カテゴリーの割合を総合し、反映されている背景の特徴を把握する。第二に、扁額が掛けられている建築を調査・分類し、各建築における扁額のカテゴリー別の頻度および特徴を把握する。第三に、扁額が掛けられている建築と扁額が持つ意味を結び付け、中国・頤和園と韓国・昌徳宮後園の空間的特徴を比較・分析する。

3. 結果および考察

(1) 扁額の意味分類と割合

扁額が持つ象徴的意味を把握し、思想(I1・I2・I3)、政治(P1・P2・P3)、景観(L1・L2・L3)で分類し、集計を行った。扁額に該当する各カテゴリーは表-1のように扁額の意味、時代的背景、立地および周辺空間の特徴に基づき抽出した。例えば、扁額「雲郁河清」からは、雲が集まる姿を描写する自然現象(L2)と黄河の水という自然物(L1)を抽出し、さらに意識から統治者により社会の安定が成り立つ恩徳(P2)が抽出できる。また、扁額「凌虚亭」の意味は「虚寂に上がる」であり、後園で一番高い所(標高90m)に位置する立地的特徴が抽出できるとともに、全景を鑑賞しながら書いた詩²¹⁾が伝わっていることから、眺望(L3)も抽出できる。このような方法で扁額の分類を行い、割合を表したのが表-2で

表-2 カテゴリー別の扁額の分布

対象	割合	思想(I)			政治(P)			景観(L)		
		I1	I2	I3	P1	P2	P3	L1	L2	L3
Y	カ	57(20.6)			99(35.9)			120(43.5)		
	サ	26(9.4)	2(0.7)	29(10.5)	32(11.6)	38(13.8)	29(10.5)	43(15.6)	47(17.0)	30(10.9)
C	カ	27(48.3)			11(19.6)			18(32.2)		
	サ	17(30.4)	3(5.4)	7(12.5)	1(1.8)	6(10.7)	4(7.1)	10(17.9)	6(10.7)	2(3.6)

注: 1) Y: 頤和園, C: 昌徳宮後園。カ: カテゴリー, サ: サブカテゴリー, 単位: 点(%), Y(n=276), C(n=36)
 2) I1 宗教, I2 陰陽五行, I3 神仙, P1 権勢, P2 恩徳, P3 知恵, L1 自然物, L2 自然現象, L3 眺望

ある。母数においては、1つの扁額に複数の象徴的意味を含む場合もあるため、その数を合算(頤和園: n=276、昌徳宮後園: n=36)し、算出を行った。

頤和園の扁額では、思想(I)20.6%、政治(P)35.9%、景観(L)が43.5%に達し、景観と政治の背景が反映されている扁額が多く現れる。具体的に景観の中では、雲、風、光、秋などの自然現象(L2)と、湖、山、花などの自然物(L1)、風景を描写する眺望(L3)がそれぞれ17.0%、15.6%、10.9%と、自然現象(L2)と自然物(L1)が高い割合を占める。政治の中では、天神や統治者による民生の安定と繁栄をのぞむ恩徳(P2)が13.8%で高く現れ、権勢(P1)11.6%、知恵(P3)10.5%も同程度で現れる。思想の中では、延命・長寿を示す神仙(I3)が10.5%、宗教(I1)が9.4%に達する(表1, 2)。一方、昌徳宮後園では、思想(I)48.3%、政治(P)19.6%、景観(L)32.2%であり、思想と景観の内容が反映されている扁額が多く現れる。具体的に思想の中では、徳、仁、修身などの儒教の理念を志向する宗教(I1)が30.4%で、神仙(I3)12.5%と陰陽五行(I2)5.4%に比べ、特に高い割合を表している。景観の中では、花、松、池などの自然物(L1)が17.9%、星、雨、風などの自然現象(L2)が10.7%、眺望(I3)が3.6%で、自然物(L1)と係わる扁額の意味が多い。政治の中では、恩徳(P2)が10.7%に達する一方、知恵(P3)7.1%と権勢(P1)1.8%で、多少低い割合を占める(表1, 2)。

(2) 建築の種類と扁額の分布

両宮殿庭園における扁額が掛けられている建築の種類を分類し(頤和園:13、昌徳宮後園:7)、それに属する扁額のカテゴリー別の頻度を集計し、その分布を確認する(表3)。建築は両宮殿庭園に共通で存在する堂、閣、齋、軒、楼、亭、門と頤和園に存在する殿を含む8種に限ることとする²²⁾。

頤和園において扁額が掛けられている建築は、殿(31.2%)、亭(19.7%)、堂(15.3%)で高く現れ、閣、齋、軒、楼、門では相対的に低い割合を表す。殿に掛けられている扁額の象徴的意味をみると、政治の権勢(P1)が18点、恩徳(P2)16点、知恵(P3)12点で高い頻度を占めており、景観の自然現象(L2)が11点と、高く現れる。閣の扁額には、宗教(I1)的意味が反映されている扁額が5点であり、堂、齋、軒、楼、亭、門においては、景観と係わっている扁

額が多く現れる(表3)。とくに亭で、景観の自然物(L1)が14点、政治の知恵(P3)が8点ときわめて多いことが指摘される。一方、昌徳宮後園において扁額が掛けられている建築は、亭と門が同率で38.9%と高く現れ、堂、閣、齋、軒、楼では相対的に低い割合を示す。亭に掛けられている扁額の象徴的意味をみると、思想11点と景観10点で高い頻度を占めており、そのうち、宗教(I1)6点、自然物(L1)5点と多く現れることが特徴である。門の扁額には、思想(12点)がきわめて高く現れ、そのうち、宗教(I1)7点、神仙(I3)4点と多くの頻度を占めている。また、閣と齋では思想、堂と軒では政治的な意味が反映されている扁額が現れる。

以上をまとめると、頤和園における扁額が掛けられている建築は殿、堂、亭で多く、殿には統治者の権勢、恩徳、知恵の政治的背景が主に反映されている。堂、齋、軒、楼、亭には景観の特徴と関連付けられている扁額が多く、政治的背景と重なって現れることが特徴である。昌徳宮後園においては、亭と門に掛けられている扁額が多く、閣、齋、楼、亭、門を中心に思想的背景が反映されている扁額が見られる。そのうち、閣、齋、門は政治的背景と、楼と亭は景観の特徴と重なって現れることが特徴と言える。

(3) 扁額からみた頤和園・昌徳宮後園空間の特徴と比較

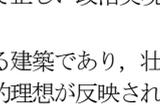
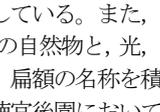
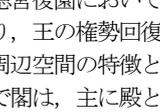
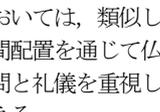
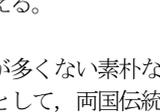
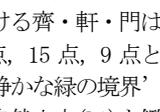
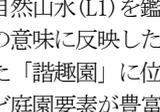
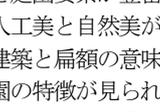
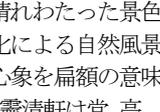
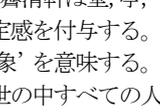
扁額が持つ象徴的意味と扁額が掛けられている建築の機能や立地および空間特徴を結びつけ、両宮殿庭園空間の特徴と比較を行う。考察は扁額の意味に反映されている背景と建築特性を考慮し、下記のように3つに分けて行う。

1) 殿・堂・閣における庭園空間

中韓の伝統建築において、殿と堂は壮大で比較的高層で構成されており、政治的行事を行うなど、公的な性格が強い建築である^{23) 24)}。頤和園の排雲殿に掛けられている扁額「雲錦殿」の意味は「雲錦のような華やかな殿」である。排雲殿は豪華な意匠と金色の屋根で構成され、強い王の権勢(P1)が感じられ、扁額の意味と関連性が高いと考えられる。また、堂、閣、軒、門の中心部に位置し、殿の荘厳な雰囲気が一層色濃い(表3:写真1)。堂には、景観の特徴と関連付けられている扁額が多く(23点)現れる(表3)。扁額「玉蘭堂」は「波を観賞する堂」を意味し、波(L1)に注目して自然風景を眺望(L3)することを意図している。地理的には昆明湖の東岸に接し、湖を鑑賞するに相応しい場所であり、建築が立地する場所と密接な関係があると考えられる(図1)。閣には、思想的背景と関連付けられている扁額が多く(6点)現れる(表3)。扁額「佛香閣」は「佛陀が理想とする第一の閣」を意味し、仏教思想(I1)と佛閣の重要性が扁額の意味から伝わる。佛香閣は雲錦殿の北側山頂(60m)に聳えており、高さ38mの八角三層四重の建築である(表3:写真2)。東西には轉輪藏(閣)、宝雲閣、南北には排雲殿、智慧海(殿)が配置され、佛香閣を中心に対称的空間構図を形成している(図1)。扁額の内包する意味が、第一の閣と対称構図により強調された佛香閣の空間的特徴によく現れている。

昌徳宮後園における堂には、政治的背景が反映されている扁額が(2点)現れる(表3)。扁額「演慶堂」は「喜び事が広がる」を意味し、王の恩徳(P2)が広がって民生が安定する意味も内包している。この堂は祝い事を祝うために立てた120間の民家形式の家で、前面に水が流れて後方には山が存在する朝鮮時代の明堂の条件を取り揃えている。演慶堂が造成された当時は、寵臣たちの強い権勢により王の権勢が弱体化された時期で、格が高い建物を建て、王の権勢回復(P1)を間接的に表現したと考えられる。即ち、演慶堂は王の政治的意志が反映された空間と言える。閣には、思想・政治的背景が反映されている扁額が各々2点現れる(表3)。扁額「書香閣」は「本の香りがする閣」を意味し、王が執筆した書籍や肖像画を乾かす所である。立地的には講学を行う宙合楼の東側に建てられており、地上から約7m上のため、風通りが良い(図1)。本を乾かす際に出る特有のにおいを香りという表現で美化して建

表-3 建築種類別の扁額分布

対象	No.	建築物/軒(%)	頻度	思想(I)			政治(P)			景観(L)				
				I1	I2	I3	P1	P2	P3	L1	L2	L3		
Y	1	殿/49(31.2)	カ サ	18 8	2 2	8 8	46 18	16 12	19 6	11 11	23 8	7 2		
	2	堂/24(15.3)	カ サ	9 3	-	1 6	11 4	5	2	23 8	8 7	-		
	3	閣/10(6.4)	カ サ	6 3	1 1	-	4 3	1	1	4 1	3	-		
	4	齋/6(3.8)	カ サ	1 -	1 -	-	2 -	-	-	7 2	3	-		
	5	軒/15(9.6)	カ サ	3 1	-	2 2	1 1	3	3	15 5	6	4		
	6	楼/7(4.5)	カ サ	3 1	-	2 2	1 1	-	-	9 4	2	3		
	7	亭/31(19.7)	カ サ	5 3	-	2 2	17 5	4	8	31 14	8	9		
	8	門/15(9.6)	カ サ	6 3	-	3 3	2	3	3	9 4	2	-		
C	1	殿/-	カ サ	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
	2	堂/2(5.6)	カ サ	-	-	-	2 1	-	-	1 1	-	-		
	3	閣/3(8.3)	カ サ	2	-	-	-	1	1	1	-	-		
	4	齋/1(2.8)	カ サ	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
	5	軒/1(2.8)	カ サ	-	-	-	-	1	-	-	-	-		
	6	楼/1(2.8)	カ サ	1	-	-	-	-	-	1	1	-		
	7	亭/14(38.9)	カ サ	11 5	2	3	-	3	2	10 1	5	3	2	
	8	門/14(38.9)	カ サ	12 1	4	-	7 1	2	2	5 2	3	-		

注:1) Y-頤和園, C-昌徳宮後園, カ:カテゴリー, サ:サブカテゴリー, 単位:点
2) I1宗教, I2陰陽五行, I3神仙, P1権勢, P2恩徳, P3知恵, L1自然物, L2自然現象, L3眺望
3) 写真:頤和園(1:排雲殿, 2:佛香閣, 3:知春亭), 昌徳宮後園(4:宙合楼, 5:愛蓮亭, 6:魚水門)

築の機能を間接的に示し、本から知恵(P3)を得て正しい政治実現を目指す儒教思想(I1)の特徴が見られる。

以上、頤和園において殿は、最も多く存在する建築であり、壮大な規模と華麗な意匠の建築様式が、王の政治的理想が反映された扁額と結び付けられ、謹厳な空間をつくり出している。また、堂は湖岸や山林が豊かな所に立地し、波、湖などの自然物と、光、影、月光などの自然現象を鑑賞する場所として、扁額の名称を積極的に反映した特徴が現われている。一方、昌徳宮後園において堂では、王の権勢が弱体化された時代背景により、王の権勢回復や民生の安定・繁栄を望む政治的理想が建築と周辺空間の特徴と関連付けられていることがわかる。両宮殿庭園で閣は、主に殿と堂の周辺に位置し、建築の機能を支えることにおいては、類似していると言える。さらに、頤和園では対称的空間配置を通じて仏教思想の尊厳性を強調させ、昌徳宮後園では学問と礼儀を重視した儒教思想の特色が見られたことが相違点と言える。

2) 齋・軒・門における庭園空間

中韓の伝統建築で、齋と軒は意匠技術や飾りが多くない素朴な形態をしており、静かに読書や修養をする場所として、両宮伝統建築においてその性格が似ている。頤和園における齋・軒・門は景観の特徴と関連付けられている扁額が各々7点、15点、9点と多く現れる(表3)。澹碧齋の扁額「澹碧」は「静かな緑の境界」を意味する。人間の世界と自然の境界に立って自然山水(L1)を鑑賞し(L3)、それに対する解釈を詩的表現で扁額の意味に反映したと考えられる。澹碧齋は園の中に新しく造成した「諧趣園」に位置する。この諧趣園には軒、楼、亭、橋、廊など庭園要素が豊富であり、城壁に囲まれた絶景を演出している。人工美と自然美が調和する庭園空間が、人間の美的対象となり、建築と扁額の意味が加えられ、芸術的美に昇格する水準の高い庭園の特徴が見られる。扁額「霽清軒」は「雨雪後、すがすがしく晴れわたった景色の軒」を意味する。雨雪(L2)を比喻して時間変化による自然風景を詩的表現で描写し、空間から感じた観察者の心象を扁額の意味に介入させたことが分かる。「諧趣園」に位置する霽清軒は堂、亭、門、廊と一つの南北軸を形成して庭園空間の安定感を付与する。排雲殿の一門「萬象昭光」は「光明尽きぬ世の万象」を意味する。賢明な知恵(P3)を発揮した政治実現を目指し、世の中すべての人に王の恩徳(P2)が到達することを願う、統治者の政治的意志が扁額の意味に込められている。排雲殿の一門前面には多様な文様で

飾った石橋が配置されており、欄干の柱には雲形象が刻まれている。高く強いイメージの橋を過ぎて政治的意志が反映された門を通過すると、王の空間である排雲殿が見えてくる。すなわち、門の空間は進入部の庭園様式と新しい空間の境界に位置し、空間の性格を転移させる特徴が見られる。

昌徳宮後園における齊は思想的背景と関連付けられている扁額のみ(1点)である(表3)。扁額「善香齋」は「良い香りがする家」を意味する。書籍を読んで保管する所だったため、良い香りは本の香りと考えられ、建築に庇が設置されているのが特徴である。扁額の意味は建築の機能と深く関係しており、学問を重視した当時代の儒教(II)の特徴が見られる。軒は政治的背景と関連付けられている扁額のみ(1点)である(表3)。扁額「寄傲軒」は「寛大な心を施す」を意味する。寄傲軒は装飾の多い建築と異なり、小さくて素朴な形態であり、北向きで採光が少ない。当時代は勢力家により左右された勢道政治のため、国政が不安定な時期であった。俗世から脱して贅沢でないつましい所で学問を研いで徳を積む意志が扁額と建築の特徴から感じられる。門には、思想的背景と関連付けられている扁額が多く(12点)現れる(表3)。宙合楼の南門「魚水門」は「王と臣下の心が水と魚のようにお互いに通じ合う」を意味する。王と臣下が一つになり正しい政治を広く行うという統治者の政治的理想が扁額の意味に反映されたと考えられる。魚水門は王が利用する大きい門と左右の臣下が利用する小さな門が一つの建築になっている(表3:写真6)。王と臣下が宙合楼へ入る前、和合を成そうとする意志が扁額と門の特徴から伝わる。

以上、頤和園において齊と軒には、景観的特徴が反映されている扁額が多く、周辺の自然山水を庭園に引き入れて審美的に庭園を觀賞し、文学的な表現方法で扁額の意味に直・間接的に反映する特徴が見られる。一方、昌徳宮後園の齊と軒には、思想的背景が反映されている扁額が多く、道徳と精神修養の大切さなどを強調する儒教理念を強調する特徴が見られる。両宮殿庭園で門は、空間の入口や性格が異なる空間間の境界部に位置し、その空間に合う扁額を掛け、空間変化に暗示を与え、特色を強くしている。加えて、頤和園の扁額には景観的特徴が多く反映され、昌徳宮後園の扁額には思想的背景が多く反映されていることがわかる。

3) 楼・亭における庭園空間

中韓の伝統建築で、楼と亭は主に四方が開放されて可視距離が良く、池や小川など景色が良い所に位置し、休息や宴会空間としてよく使われた。頤和園における楼・亭には、景観的特徴と関連付けられている扁額が各々9点、31点と極めて多く現れる(表3)。扁額「夕佳楼」は「夕日を見るところ」を意味する。夕日(L2)の美しい自然美と良い眺望(L3)が可能である場所の重要性を感じさせる。夕佳楼は昆明湖の東側に位置する玉蘭堂と宜藝館の間に建てられ(図1)、2階で構成されており、王が休息をする建築である。夕日に赤く染まった昆明湖と遠くに見える万寿山が見られる。扁額が楼の立地的特徴と機能、周辺空間の特徴と係わっていることが分かる。扁額「知春亭」は「春の息吹きを感じる亭」を意味し、春(L2)の季節的要素が扁額の意味にこめられている。知春亭は昆明湖の東側にある小さな島の中央に位置し、橋を渡って進入する。橋を通ると2本のヤナギが植えられ、知春亭空間の雰囲気をつくり出す(表3:写真3)。ヤナギは4月に花が咲く生育特性を持ち、春の訪れを知らせる建築の名称と関連付けられ、扁額と空間的特徴を連結する重要な庭園要素と言える。

昌徳宮後園における楼には、思想・景観的特徴と関連付けられている扁額が各1点ずつ現れ、亭においては各々11点、10点と極めて多く現れる(表3)。扁額「宙合楼」は「天地が一つになって自然の理により政治をする」を意味し、天地調和、天人合一を望む儒教的観念(II)が扁額の意味に反映されている。宙合楼は政治空間である「治朝」に近接して位置し、地上から約7m上に建て

られ、後園で最大の建築規模である。講学と書籍を保管する場所であり、殿に上って下を眺めると、四角い形態の池「芙蓉池」とその中に丸い形態の島が見られる(図1,表3:写真4)。これは「丸は天、四角は地」を象徴し、扁額の意味と符合することが分かる。扁額「愛蓮亭」は「蓮華を愛する」を意味する。亭の名称は「王が君子の徳(II)を象徴する蓮華を愛する」から名付けられたと言われている²⁵⁾。愛蓮亭は「愛蓮池」という池にかけて建てられ、亭から外を見ると、池の水面上に浮かんでいる蓮華(L1)が見られる(表3:写真5)。扁額の意味と植物が内包する意味から儒教を理想とする空間的特徴が見られる。

以上、両宮殿庭園における楼と亭には、風景を鑑賞するのに相応しい建築構造、景観要素が豊かな立地、遊楽空間としての活用という特徴が多く見られた。その上、頤和園では、社会の安定と繁栄に関する念願が景観特徴に多く比喻されており、一方、昌徳宮後園では、儒教社会が追い求める徳目と理想郷が景観特徴に比喻されて現れることが多かった。

4. おわりに

本研究では、中国・頤和園と韓国・昌徳宮後園における扁額の意味解釈とともに建築および庭園の空間分析をし、両宮殿庭園の特徴を明らかにした。その結果、次の3点が明らかとなった。①頤和園には、湖の自然物や夕日、雲の自然現象、景観の描写などの周辺の自然風景を反映した扁額が多く、一方、昌徳宮後園には、徳、仁、修身などの儒教理念と長寿や神仙世界への憧れといった思想的背景が扁額の意味に多く反映されている。②頤和園は殿、堂、亭を中心に扁額が掛けられており、扁額の内包する意味が建築の立地的特徴と関連付けられる特徴が見られる一方、昌徳宮後園は亭と門を中心に扁額が掛けられており、道理と教育を重視した当時代の儒教思想と密接に関連付けられている特徴が見られる。③頤和園は、周辺の自然山水に対する感想を詩的な表現方法で扁額に引き入れ、庭園の価値を文学・芸術分野に広げ、より一層発展させる一方、昌徳宮後園は、理想世界の実現に対する意志を扁額の意味にこめ、建築の特色や庭園の構成要素に相応しい空間をつくり出していることが理解される。

補注及び引用文献

- 1) 鈞成・成綱(1985):頤和園園楹聯總集刻文:北京日報出版社,2
- 2) 文化財庁(2006):宮闕の懸板と柱聯2:スリユサンパン,6-7
- 3) 權 寧愛(2006):朝鮮時代の扁額と柱聯研究:京畿大校修士學位論文
- 4) 前掲書1)
- 5) 章 俊華(1999):中国皇家庭園頤和園における「扁額」からみた庭園空間の特徴について:日本造園学会誌62(5),761-764
- 6) 谷 光燦・田代 順孝(2008):拙政園の扁額と対聯による意境と空間に関する研究:環境情報科学論文集22,430
- 7) 眞 相徹(1998):朝鮮時代宮闕建築物の命名特性:東新大校論文集10,511-528
- 8) 前掲書3)
- 9) 咸 光珉(2012):扁額からみた韓国の昌徳宮後園空間の特徴について:環境情報学会論文集26,393-398
- 10) 孫 鐘勳・咸 光珉(2011):昌徳宮後園の詩文分析による意境と景観特性:韓国伝統造園学会誌29(3),124-133
- 11) 中国,北京市北西郊海淀附近にある三つの山と五つの庭園で、萬壽山,香山,玉泉山,清漪園(頤和園),靜宜園,靜明園,暢春園,圓明園を表す。
- 12) 昌徳宮後園の扁額における以前の筆者の研究(前掲書9)では、石に刻まれている6箇所も含んだ(全42箇所)が、今研究では頤和園との比較研究のため扁額と認められる36箇所を対象にした。
- 13) 夏成鋼(2008):頤和園匾額楹聯解讀:中国建筑出版社,411pp
- 14) 前掲書5)
- 15) 前掲書2)
- 16) <http://e-kyujanggak.snu.ac.kr>,2012.7.5参照
- 17) <http://db.itkc.or.kr>,2012.7.1参照
- 18) 頤和園の扁額(前掲書5)により、思想・芸術・政治的内容で、昌徳宮の扁額は眞(前掲書7)により、景観・観念・機能・形態的内容で分類されている。
- 19) 前掲書5)
- 20) 前掲書9)
- 21) 肅宗(1674~1720)が書いた詩「題凌虚亭」と正祖(1776~1800)が書いた詩「凌虚亭」は、凌虚亭からの眺望景観の美しさを歌った詩として、今に伝わる。
- 22) 頤和園での殿は、規模が大きく王の公的な業務を行う建築として、扁額と庭園空間の特徴を明らかにするのに重要な要因になると判断し、本研究対象に含んだ。一方、昌徳宮は外朝(臣下たちが事務する空間)、治朝(王と臣下が政治を行う空間)、燕朝(王と王妃及び王室家族の生活空間)、後園(宮の庭園)の4つのエリアに分けて使われており、殿は治朝エリアに分布しているため、後園では現われない。
- 23) 章 俊華(2000):中国皇家庭園と私家庭園の「屋宇」による空間構成の特徴とその比較について:日本造園学会誌63(5),399-402
- 24) 洪 順敬(1999):我々の宮闕語:チオンニョンサ出版社,121pp
- 25) 崔鐘德(2006):朝鮮の宮廷昌徳宮:ヌルハ,177pp